

地域支えあい事業 コロナ禍における取り組み事例

2021年3月

編集／名古屋市社会福祉協議会 地域福祉推進部

新型コロナウイルス感染症拡大により、地域福祉活動の自粛を余儀なくされ、対応のための話し合いの場でさえも十分に確保することが難しい状況が続いています。そんな状況の中、名古屋市内の地域支えあい事業実施学区では、「コロナ禍の今だからこそ地域に必要な取り組みがあるはず」と、地域住民の話し合いの中で、さまざまな取り組みが継続されたり生まれたりしています。

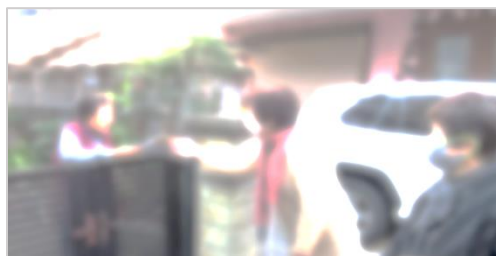
ここで紹介できる取り組みはほんの一部ですが、皆さまの活動のヒントにいただければ幸いです。

あったか訪問活動（訪問による安否確認と情報共有）

コロナ禍により、住民相談窓口を兼ねているサロンや認定事業であるふれあい給食会が自粛となり、給食会のボランティアから参加者の安否を心配する声があがりました。

そこで、地域福祉推進協議会が作成していた送迎マップをもとに、ホームエクササイズ（なごや介護予防・認知症予防プログラム）の資料と一筆を添えたカードを組み合わせて、社会福祉協議会の学区担当者とボランティア数名で訪問活動をしました。

生活状況や困りごとを聞き取り、活動後に、サロンのボランティア、ご近所ボランティアコーディネーター、いきいき支援センターの職員、社会福祉協議会職員（学区担当者、地域支えあい事業担当者）で情報共有を行いました。



コロナ禍での連携（地域と専門職の連携）

住民相談窓口にて、高齢者（Aさん）から不用となった絵画を捨てるのを手伝ってほしいとの依頼があり、ボランティア（民生委員）とご近所ボランティアコーディネーターで訪問してお話をうかがったところ、ご本人の希望で業者に買い取ってもらうこととなりました。その手続きをお手伝いすることになりましたが、その途中、コロナ禍の影響でAさんが業者の訪問を拒否されたことから、LINEで業者とやりとりをすることに。Aさんはコロナに過敏になりだんだんとふさぎ込む様子が見られ、電話にもでなくなってしまいました。訪問にも応じてもらえないと、ご近所ボランティアコーディネーターから社会福祉協議会に相談がありました。いきいき支援センターに確認したところ、介護予防のプランを担当している職員がAさんと連絡がとれており、元気なことを確認しました。地域の方も安心され、その後民生委員が電話を入れたり、サロンにお誘いしたりしています。

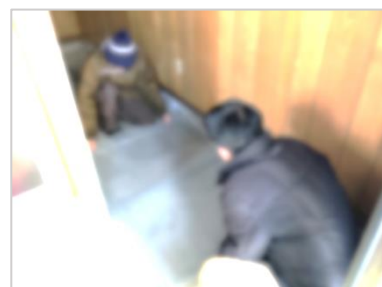
コロナ禍でいきいき支援センターの職員が訪問できない中、地域の方から情報提供があったり、地域の方が関わらない部分を専門職が関わっていたりと連携の大切さを感じています。



小修繕ボランティア始動（生活支援ボランティア）

地域支えあい事業の開始とコロナ禍が重なってしまい、事業の説明、周知やボランティア募集が全くできないままスタートをきるようになってしまいました。2人のご近所ボランティアコーディネーターが、区社協が開催した小修繕ボランティア養成講座（網戸の張り替え）を受講されており、始動するにあたり、この学区でも始めようと決定しました。

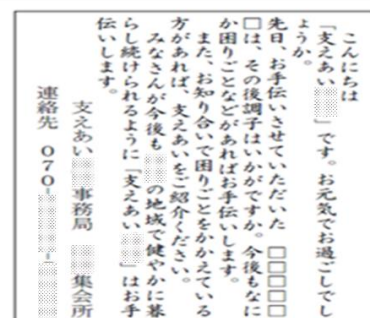
組回覧で依頼を募集したところ3件の依頼がありました。活動にあたり、地域支えあい事業の案内をしつつ、困りごとをヒアリングする中で、電球の交換等の次の活動にもつながっていきました。小修繕作業については、コロナ感染防止のためすべて屋外で実施しました。また、依頼していただいた方に、ボランティアとしての登録についても声かけをしています。コロナ禍の中でも、着実な一歩を踏み出すことができました。



近況伺いハガキ（コロナ禍での活動の工夫）

コロナ禍により、相談窓口への依頼ではなく電話での依頼が中心となりました。コロナの影響もあり依頼が減少していたため、「このコロナ禍の中でもちょっとした困りごとがあるのではないかと考えたご近所ボランティアコーディネーターが以前依頼いただいた方を対象に、「近況伺い」のハガキを郵送することにしました。

50人ほどに郵送しました。基本の文章構成は同じですが、送る方に合わせ一部の文章を変えることができるように工夫しています。（先日お手伝いさせていただいた〇〇は、その後調子はいかがですか。等）その結果、4人の方からお礼のご連絡があり、その内1名は生活支援活動へとつながることができました。自ら発信することで得られたつながりだと感じています。



みんなでマスクを作ろう活動（コロナ禍での活動の工夫）

コロナ禍でマスクの品薄により不安が募る中、区内の高齢者と小学生（1年生）へのマスク供給を目的に、マスク製作プロジェクトが立ち上がりました。コロナ禍でのボランティア活動となるため、自主的な参加協力を呼び掛けたところ、総勢31名の協力者が集まりました。やむなく製作活動に協力できない方からは、マスクの「寄付」という形でご協力いただき、寄付も含め305枚のマスクを区内の小学生、高齢者、学区サロン参加者に配布することができました。

コロナ禍での初期活動であり、手探りの活動ではあったものの、マスクの品薄に悩む地域の声に対応した取り組みでした。



マスク助け隊（コロナ禍での活動の工夫）

新型コロナウイルスにより全国的にマスク不足に陥った時期、「マスクが手に入らず、不安を抱えている方がいるのではないかと感じ、マスク製作キットを手作りし、地域の方に配布することになりました。

10人ほどのボランティアが集まり感染予防対策のもとキットを作成しました。材料（不織布、輪ゴム、固定するためのテープ）とともに作り方の用紙を入れ、学区の小中学生、教師と役員を対象に、約220個作成し配布しました。輪ゴムを使っていることや見た目等によりなかなか実際の使用までには至らなかったそうです。コロナ禍でも、地域の困りごとをしっかりと把握し、その解決に向けて検討した結果「マスク助け隊」という活動が生まれました。使用に至らなかった点は残念ですが、このような姿勢が地域の支えあいには必要だと感じました。



コロナ禍での相談窓口開設と広報の工夫（コロナ禍での活動の工夫）

コロナ禍により、月に2日開設していた相談窓口併設型サロンを閉鎖しました。参加人数が多く、飲食物を提供していたため再開が困難であること、民生委員の訪問活動も自粛していることから見守りができない状況にありました。

学区で検討した結果、室内では感染症対策が不十分のため会場周りのウォーキングコースを散策することを考案しました。感染症と熱中症対策のためマスクを着用のうえ、傘を差して距離を取るなど参加者にも協力を得て実施しています。

また、コロナ禍で新規の相談が減っている状況を受け、年末の大掃除に合わせて「困りごと受付中」のチラシを作成し組回覧したところ、7件の相談につながりました。

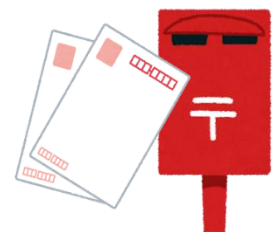


民生委員児童委員協議会の取り組みからのニーズ確認（コロナ禍での活動の工夫）

非常事態宣言の中、民生委員の訪問対象となっている方の様子を把握するために、往復はがきでの安否確認を実施することになりました。

往信面には、定例のあいさつ文に加え、担当民生委員からのメッセージを添えました。返信面には気になること、困りごとを書いていただく欄を設けました。返信は全体の3割程度ではありましたが、日頃は訪問を断られる方からの反応や、なかなか連絡のつかないご家族からの返事もあり、一定の成果があったと思います。また、困りごとに関しては、日常生活上の外出、買い物等で困っている方が多く、そのような内容に対して支援が必要である状況がわかりました。

往復はがきに書かれていた困りごとに関して、地域支えあい事業の生活支援活動によって解決するまでには至りませんでした。地域の困りごとの傾向を把握することができました。



お弁当を通して地域とつながる（地域の福祉団体との連携）

子ども食堂や子どもの居場所づくりを実施している団体が、コロナ感染拡大防止のため会食は中止して、お弁当の配布を始めることになりました。

しかし、社会福祉協議会や区役所・児童相談所などを通して支援が必要な方の情報提供があり、お弁当の利用希望者が増え、調理や配達が大変な状況となってしまいました。

団体から相談を受けた区社協職員が、団体の拠点がある地域のボランティアへ相談したところ、地域支えあい事業の活動として、お弁当の調理補助のボランティアを行うことになりました。

当初は、この団体の活動内容を知らない地域の方も多かったのですが、実際にボランティアとして参加し一緒に活動することで、団体のことを知ることができました。また、学区内にも支援が必要な方がいるということが分かり、学区全体で支援できたことも良かったと思います。



マグネット掲示方式の見守り活動（コロナ禍の影響を受けない活動）

4年前から、ある集合住宅で玄関にマグネットを貼り付けることによる安否確認で見守り活動をしています。

コロナ禍においても、月1回の見守り会議で、住民の生活状況の把握と支援が必要な世帯への対応を継続しています。

担い手もこのマグネット掲示方式での取り組みに手ごたえを感じており、半年ほど前から同じ集合住宅の他の棟でも見守り活動を展開する動きが出てきました。

マグネット掲示方式の見守りは、コロナ禍をきっかけに始まった活動ではありませんが、外出の機会の減少によって閉じこもりがちな高齢者もいらっしゃる中、コロナ禍の影響もなく取り組むことができる取り組みです。



コロナ禍でのアプローチから～おたすけ活動の広がり～（生活支援活動の広がり）

相談窓口の広告を地域情報誌に掲載したところ、おたすけ活動を実施していない町内の高齢者世帯から庭木剪定の依頼が入りました。今まではご主人が剪定していましたが、体力的に脚立に上ることが難しくなったということでした。

ボランティアを調整し対応しましたが、他にも困っている高齢者世帯があるのではないかとということで、どの町内でも対応できる学区全体のおたすけ隊を前向きに検討していくことになりました。学区全体に広げるために地域支えあい会議の議題にあげ、ご近所ボランティアコーディネーターから剪定作業の事例を報告し、みんなで考え話し合う場を設けました。ボランティアからの提案で、イベントベストや身分証の検討を進めているところです。ボランティアも増やしたいということで、ご近所ボランティアコーディネーターが個別に声かけするなどして7名が新たに加わるようになりました。

剪定終了後、依頼者から「剪定した木は冬になるときれいな花が咲くから、見に来てね」と言われました。人との接点がなくなり孤立していく人が増えるコロナの時期だからこそ、工夫しながら、戸外での活動やできる範囲で住民との接点を作っていくことが大切だと感じています。



生活支援活動から始まる見守り（ふれあいネットワーク）活動（活動内容の広がり）

この学区では、本年度からふれあいネットワーク活動を開始することとなりました。もともと、地域支えあい事業の生活支援活動を利用された方に対して、その後草は伸びていないか、また、困っていることはないかなどと気にかけてくださるボランティアがいて、定期的にその方を見守っていらっしやったそうです。

そこで、その活動を見える化し、心配な方の情報を学区で共有し、皆で見守っていこうということになり、本人にも見守っていることを伝えたくて活動を開始しました。

コロナ禍の中、なかなか外に出る機会もなくなってしまい不安な毎日を過ごしている方にとって、近所の方が見守ってくださっているということで、安心した生活を送ることにつながっていると思います。



敬老祝い品配付と併せた地域支えあい事業の周知（コロナ禍での事業の広報）

新型コロナの影響で学区の敬老事業が中止になり、今年度は敬老祝品を参加予定者の自宅に配付することになりました。

学区で協議の結果、敬老祝品と併せて、地域支えあい事業相談窓口の連絡先ステッカー（マグネット）を配付しつつ、住民の方の困りごとの把握に努めました。

コロナ禍で敬老事業が開催できなかったことは残念でしたが、お宅を訪問できる機会を上手に活用することで、地域支えあい事業を広く知っていただく取り組みを実施し、それにより生活支援ニーズが増加しました。

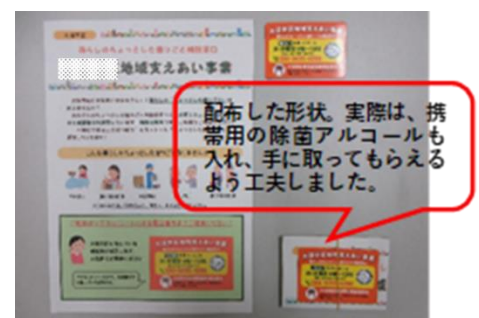


地域支えあい事業の広報 及び 利用者のニーズキャッチ（コロナ禍での事業の広報）

相談窓口を開設して1年が経過しましたが、地域内での事業の認知度が低く、相談が増えない状況にありました。

コロナ禍でほとんどの事業が中止となる中、学区の敬老会が開催されることとなりました。例年は高齢者を集めてイベントを開催した後、弁当等の手土産を配布していましたが、今年は手土産配布のみとなりました。イベントを開催しない代わりに手土産を豪華にしたこともあり、多くの高齢者が来訪すると予測。手土産の中に、地域支えあい事業で作成した広報グッズ（マグネット）とチラシを同封することにしました。

ご近所ボランティアコーディネーターと社会福祉協議会職員が協力し、広報グッズを準備。当日は、500人を超える高齢者が敬老会の記念品を受け取りに来訪されました。数日後、チラシを見た方から古本や雑誌回収の相談が入り地域支えあい事業で対応しました。小さな積み重ねが大切だということを実感しました。



学区地域包括ケア推進懇談会（コロナ禍における話し合いの場）

コロナの影響で、ふれあい給食会やサロンが中止となり、生活支援の依頼も減少しました。「活動ができない今だからこそ地域のことについてじっくり話し合う場があるといい」というご近所ボランティアコーディネーターの一言で実施することになりました。

「会議」ではなく「懇談会」として、ざっくばらんに地域の取り組みや課題について話し合いました。8月から

月1ペースで開催。〇月は〇〇町というように町内単位で町内会長、民生委員、ボランティアに参加してもらいました。区役所、保健センター、社会福祉協議会、いきいき支援センターの担当者も毎回参加しています。

これまで町内単位で地域住民の方々とお話する機会がなかったため、町内単位で課題を把握することができ、いい機会となっています。また、懇談会を通じて関係機関とのつながりを深めることができました。



相談窓口のアウトリーチ～その一歩～ボランティア交流会（コロナ禍における話し合いの場）

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、地域支えあい事業も自粛をしていましたが、コロナ禍では、誰かとつながっていること、誰かを支えたり支えられたりすることがとても重要であると再認識されています。そこで、今後の地域支えあい活動やご近所の見守り活動等について意見交換をするため、ボランティア交流会を開催しました。

意見交換では、今後の支えあいは町内単位で、町内会長や組長が相談窓口へのつなぎ役になるというのではないかと、また遠慮される高齢者にも一歩踏み込んで、困りごとを把握していくことが必要なのではないか等の意見が出されました。今後は、学区内の公園の草取りをするなど、身体を動かし地域に貢献しながら、ボランティアが交流する取り組みを予定しています。

コロナ禍ではボランティア交流会を開催することも賛否があるかもしれませんが、直接顔を合わせ、意見交換をすること、交流をすることの大切さを改めて感じる機会となりました。

